

## 第 8 回アジアテレメディシンシンポジウムでテレビ会議を用いて講演しました。 (2014/12/13)

場所：九州大学（福岡市）  
テーマ：「国際拡大、国内拡大」

12月12-13日（金、土）に九州大学で開催された第8回アジアテレメディシンシンポジウムで江川新一教授が遠隔テレビ会議を用いて講演しました。現在、世界各地でテレビ会議システムを用いた遠隔医療が積極的に展開されつつあります。遠隔医療には以下のようないくつかのメリットがあり、災害時の保健・医療コーディネーターをはじめとして情報共有に強みを発揮することが期待されます。

- すぐれた手術手技や内視鏡手技などを遠隔地でもリアルタイムに共有できる。
- 患者さんの様子を遠隔地で観察できる。
- 現地から離れている専門医と情報共有ができる
- 教育に使用することができる。
- 多地点での情報共有ができる。

江川新一教授は、わが国の災害医療体制について概説し、災害医療における遠隔医療へのニーズと期待、現状のICTで達成できていない課題などについて講演しました。用いたテレビ会議システムはGoogle社のHangoutなどにも応用されているシステムですが、コンピュータからインターネットまでは有線での接続のほうがよいこと、動画やカーソルの動きを相手方に伝えるためには専用の器材が必要であること、誰かが話しているときには別の会話を並行で行うことができないなどの技術的改善点がありますが、音声、画質は良好で、津波から避難する際の現実感、災害科学国際研究所の役割などを伝えることができました。

ネパール、バングラデシュ、ウクライナ、ペルー、オーストラリアなど地理的な条件が厳しく人がまばらにしか住んでいないような地域での医療は、平時であっても大きな困難を伴っています。そのような地域でこそ遠隔医療は平時から多く活用されるべきニーズがあり、また活用することによって、災害時の情報共有や対応がより速やかになることが考えられます。災害医学を世界各地に普及し、標準化するうえでもICTの進歩と柔軟性、平易性の改善が求められています。



九州大学での会場の様子  
スライドは全画面表示され、スライド送りや動画の再生もスムーズに行われた



ディスカッションする座長、右上が江川新一教授、右下はオーストラリアからの遠隔参加者

文責：江川新一（災害医学研究部門）